

ほうじょうき
方丈記

一

かものちようめい
鴨長明

ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。

よどみに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久し

くとどまりたる例なし。世の中にある、人と栖と、また

かくのごとし。たましきの都のうちに、棟を並べ、叢を争

へる高き、いやしき人の住ひは、世々を経て、尽きせぬ物

なれど、これをまことかと尋ねれば、昔ありし家はまれ

なり。或は去年焼けて今年作れり。或は大家ほろびて小

家いえとなる。住む人もこれに同じ。所も変らず、人も多か
 れど、いにしへ見えし人は、二三十人が中に、わづかにひと
 りふたりなり。朝あしたに死しに、夕ゆうべに生うまるるならひ、ただ水の泡あわ
 にぞ似にたりける。不知しらず、生うまれ死しぬる人、何方いずかたより来きたりて、
 何方いずかたへか去さる。また不知かり、仮やどの宿たり、誰たが為ためにか心なやを悩なやま
 し、何よろこによりてか目を喜よろこばしむる。その、主あるじと栖すみかと無常むじょう
 を争あらそふさま、いはば朝顔あさがおの露つゆに異ことならず。或あるいは露つゆ落ちて
 花のこ残えれり。残るといへども、朝日あさひに枯かれぬ。或あるいは花あなしほみ
 て露おきなほ消ええず。消えずといへども、夕ゆうべを待まつ事なし。